

氏名(本籍)	ひがし 東	くにまさ 久仁政(長崎県)
学位の種類	博士(デザイン学)	
学位記番号	博甲第3495号	
学位授与年月日	平成16年3月25日	
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当	
審査研究科	芸術学研究科	
学位論文題目	伊勢神宮社殿の形態に関連する記述の変遷とその背景	

主査	筑波大学教授	工学博士	安藤邦廣
副査	筑波大学教授		鵜沢隆
副査	筑波大学助教授	農学博士	鈴木雅和
副査	東京工業大学教授	工学博士	藤岡洋保

## 論文の内容の要旨

本論文は、日本の歴史的建築の中でも極めて象徴的な存在である伊勢神宮社殿について、古代から現代にいたるまでの主要な文献の中で、その建築がどのように描写・評価されているかということを経時的背景との関係から比較対照し、明らかにしようとするものである。伊勢神宮社殿の建築史的な研究には、現在まで多くの蓄積があるが、それぞれの時代のその建築の実体を実証する資料は極めて限られており、必ずしも各時代の社殿の形態が解明されているとは言い難い。そうした点で、本論文が意図するところは、実証困難な伊勢神宮社殿について、その形態を描写・評価した各時代の多数の記述を新たに検証することで、建築の形態に関連する記述の変遷を明らかにし、建築史的な研究へと繋がる新たな知見を得ることにある。

序章では、本論文の研究の目的、方法、既往研究との関係、そして現存する伊勢神宮社殿の建築形式などについて述べている。

第1章は、奈良時代の主要な文献における伊勢神宮社殿についての描写・評価を検討している。奈良時代の文献と見なし得る「祝詞」の中に、「底つ石根(いわね)に宮柱ふとしり、高天の原に氷木(ひざ)たかしり」という、古代の慣用表現を伊勢神宮社殿に対して使用した例が見られる一方で、『日本書紀』『古事記』『万葉集』『伊勢国風土記(逸文)』『上宮聖徳法王帝説』『正殿等飾金物注文』といった文献には、伊勢神宮社殿に関わる記述が多く出てくるものの、慣用表現をはじめとする伊勢神宮社殿を修飾するような語句は見受けられなかったことを確認して、奈良時代の文献における記述は、「祝詞」における慣用表現を例外として、いずれも叙事的な記述であったことを指摘している。

第2章では、平安時代から鎌倉時代前半の文献を対象に、その描写・評価について検討している。その中で、伊勢神宮社殿の簡素さを指摘した記述が、『俊乗坊重源伊勢太神宮参詣記』や『西行物語』、無住の『沙石集』といった文献の中に複数存在していることを明らかにし、その背景として、中国の古典の影響や、寺院建築との比較から伊勢神宮社殿の簡素さを指摘する視点があったとの推論を行っている。また、そうした簡素さを指摘した記述の他にも、慣用表現を使った記述や、伊勢神宮社殿の原型を「日小宮」や「天上の図形」とする伊勢神道の記述も見出した。「日小宮」や「天上の図形」は、超越的な建築であり、それを伊勢神宮社殿の原型としたのは、仏教側に優越しようとする伊勢神道の意識が関係しているのではないかとの推

測を試みている。

第3章は、鎌倉時代後半～江戸時代の文献を対象としている。その結果、貝原益軒の『扶桑記勝』、井原西鶴の『日本永代蔵』、滝沢馬琴の『開巻驚奇侠客伝』の中に、伊勢神宮社殿の簡素さを指摘した記述があることを示し、そうした記述が現れた理由として、依然として中国の古典の影響があったこと、さらには瓦葺屋根の建築の普及によって相対的に茅葺屋根の伊勢神宮社殿が簡素な建築に見えるようになったことがあるのではないかと解釈を提示している。また、『伊勢参宮名所図会』の記述のように、伊勢神宮社殿を原始的と見なしている記述も見出された。その一方で、本居宣長の『玉勝間』には、伊勢神宮社殿を簡素な建築と見なすこととは対照的に、壮麗さ・立派さをも称揚した記述があることも指摘して、江戸時代には、伊勢神宮社殿に対する多様多岐にわたる解釈が存在していたことを明らかにしている。

第4章は、明治時代から昭和初期の文献を対象に、同様な方法で検討している。建築史・美術史・神道史の分野では、すでに明治期の濱田青陵氏の「仏教以前の日本美術」(明治40年, 1907年)や、廣池千九郎氏の『伊勢神宮と我国体』(大正4年, 1915年)、伊東忠太氏の「伊勢両宮の建築」(大正10年, 1921年)のように、伊勢神宮社殿の簡素な形態やその建築史的重要性を指摘して称揚した文献の存在について詳述し、併せてその時代背景との関係について論じている。また昭和初期には、「簡素・単純・純粹」という言葉を介して、近代建築の「合理主義」思想の反映としての日本の伝統建築の評価の文脈の中で、新たに伊勢神宮社殿を高く評価した記述を位置付け、その経緯について考察している。

第5章は、主に文化論的観点から昭和初期の文献における評価に関して検討している。本章では、昭和8年に日本を訪れ、伊勢神宮社殿をパルテノン神殿に比肩する世界的な建築であると賞賛した建築家ブルーノ・タウトの評価を軸に、その評価の影響との関連から昭和初期の多岐多数の文献における伊勢神宮社殿についての記述を収集している。タウトに言及した戦前・戦中の文献87本を検討し、その中でタウトの伊勢神宮社殿評価を引用したものが24本であったことを確認している。そして、その24本の文献の大半は、その主な論旨が日本文化の賛美へと収斂するタウトの評価の引用であったと位置付け、そこに当時のナショナリズムの反映としての側面を指摘している。

第6章は、主に1950年代、60年代の文献を中心に、戦後の伊勢神宮社殿の描写・評価について検討している。丹下健三氏は、それまであまり言及されてこなかった「原始的な迫力」や「力強さ」といった属性が伊勢神宮社殿に見出されることを指摘し、池辺陽氏や吉田五十八氏は、伊勢神宮社殿の装飾性・技巧性に着目、さらに渡辺保忠氏は、伊勢神宮の閉ざされた宮域の排他性を問題にしていることに言及して、戦後には、伊勢神宮社殿に関する多様な視点からの評価が現われるようになったことを確認している。ただし、伊勢神宮社殿の形態については、その美しさを認める記述が主流をなしており、その点では、戦前・戦中の記述と戦後の記述の間に断絶はないことを指摘している。

終章では、本論文の各章を要約するとともに、各時代で対象とした多数にわたる記述をその内容から10種類に分類し、それらの記述の論旨がどの時代に現れ、どのように受け継がれ、また途絶えたのかを、年表の形で整理した。そうした検証の結果、特に近代以降に現われた伊勢神宮社殿に関する幾つかの通念について個別に批評、検討し、それぞれの通念の妥当性と疑問点を明らかにしている。そして最後に、研究の過程で新たに浮かび上がってきた問題点をまとめ、今後の建築史的な研究の課題を示している。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

この論文の意義は、日本の建築の中でも極めて象徴的な存在でありながらも、歴史的な経緯の中でその建築の実体が必ずしも明らかにされているとは言い難い伊勢神宮社殿という特異な対象について、奈良時代から現代に至るまでの多数多岐にわたる歴史的文献から、その建築についての記述と評価を渉猟的に調べ上げ

たことにあり、終章で整理、纏めあげられた年表がその成果を端的に表しているものと評価される。また、奈良時代に完成したと考えられる「祝詞」を歴史的史料として積極的に採用したことも、歴史的研究への新しい観点からの取り組みであったと評価されよう。

本論文で検証された、それぞれの時代における文献による伊勢神宮社殿についての評価の変遷は、一定の意義を持つものと考えられるが、さらにそれぞれの評価の時代的起源へと遡る推論を提示すると同時に、その時代背景との関係からの解釈を積極的に試みようとした点でも意欲的な研究であると位置付けられよう。そうした検討により、特に近代以降に現われた主要な幾つかの通念についての批評のための、文献による実証的な根拠を示したことも、本論文の成果のひとつであり、日本建築史研究のための新たな史料的価値の提示として意義があると認められる。

著者には、文献を駆使した研究方法に基づく本論文の成果をひとつの出発点として、さらなる古代の伊勢神宮社殿の建築形態の起源についての推論をも視野に入れた研究の展開が望まれるところである。また、ひとつの建築的対象について永い歴史的時間の中での評価の変遷を辿るという研究方法は、伊勢神宮社殿という研究対象ゆえの有効な方法であり、今後の著者の歴史研究の新たな研究方法の開拓もまた大いに望まれるところである。

よって、著者は博士（デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。